

植月 学¹: 報告—第22回日本植生史学会談話会Manabu Uetsuki¹: Report – The 22nd forum of the Japanese Association of Historical Botany

第22回日本植生史学会談話会が、2004年3月20日・21日に、千葉県においておこなわれた。「植生史解明のための野外調査法」というシリーズで開催される第1回目の談話会であり、今回のテーマは手動ボーリングによる沖積層堆積物の採取と観察であった。当日はあいにくの雨であったが、学生や研究者など17名の参加者があった。

1ヶ所目の採取地は、八日市場市と多古町の境界付近に位置する台地の開析谷の水田地帯であった。はじめに明治大学の叶内敦子氏の指導のもと、シンウォール型サンプラーによるボーリングをおこない、次に、千葉県立中央博物館の奥田昌明氏による指導のもと、ロシア式サンプラーを用いたボーリングをおこなった。解説も交えながら、重量の差と採取できるサンプル量など両器具の特徴や相違点と、必要な作業人数の差などについて体験的に学ぶことができた。

ぬかるみに足を取られ、泥まみれになりながらも、どちらも深さ330 cmまでのサンプルを採取することができた。その後、雨は激しさを増し、残念ながら当初予定していた2地点目でのサンプリングはできなかったが、悪天候の中、1地点でも無事サンプルを採取することができたのはひとえに参加者のチームワークの良さ故だろう。

その晩は千葉市内の旅館に宿泊した。互いに初対面の人間が多かったようだが、夕食後の懇親会では多彩なテーマについて語り合いながら、親睦を深めることができた。

翌日は千葉県立中央博物館に移動し、得られたコア・サンプルの観察と記録をおこなった。参加者はそれぞれ色調や土質、含有物などを観察し、記載法を学びながら柱状図を作成した。中層から上層にかけて徐々に泥炭が増加する

ことや、全般に粘土質であるが、最下層ではややシルト質となることなど、この地点における環境変遷を視覚的に捉えることができ、大変興味深かった。また、花粉分析や年代測定用のサンプルの採取もおこなった。

終了後、江口誠一氏によるご案内のもと、博物館の収蔵庫を見学させていただき、豊富な収蔵品を前に議論の花が咲いた。最後に思わぬ収穫を得て、参加者一同満足感に満たされながら会はお開きとなった。

今回の実習は初心者にはもちろん勉強になったが、経験者・専門家にとっても共通認識を形成する良い機会になったように感じた。たとえば、柱状図作成の際の、色調・土質の認定や記載法については経験者の間でも微妙な差があり、互いに情報交換をする場面が見られた。おそらくどの分野でもいえることだろうが、専門家同士でもこのような方法論の細かい部分について実地で話し合うことはあまりないのではないだろうか。

私自身は考古学を専門にしているが、これまでボーリングを自らおこなう機会はなかった。このように実際に体験することを通じて、隣接分野の方法論について理解を深め、その問題点や限界点についても把握しておくことは、データを利用する際の基本であることをあらためて実感させられた。今回の目的は、一次データ生産の出発点となるボーリングについて、体験的に共通理解を得ることであったが、当初の目的は十分に達成されたと感じた。今後ともこうした実践的な会を開催して頂けると非常に有意義であるし、また参加させていただきたいと思う。

(¹ 〒400-8504 山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県教育委員会 博物館建設室)

神谷千穂¹: 報告—第22回日本植生史学会談話会Chiho Kamiya¹: Report – The 22nd forum of the Japanese Association of Historical Botany

第22回植生史談話会が、2004年3月20、21日に実施された。今回は「植生史解明のための野外調査法Ⅰ 手動ボーリングによる沖積層堆積物の採取と観察」講師：叶内敦子氏（明治大学）をテーマに、1日目に千葉県多古町で野外ボーリング作業、2日目に千葉県立中央博物館において室内実習を行った。参加者は17名であった。

20日は八日市場市と多古町の境界付近の水田でのボーリング作業であったが、朝から雨が降りしきり、野外作業を行うにはかなり悪いコンディションであった。最初に、シンウォール型サンプラーを使って堆積物を採取した。シンウォール型サンプラーは、堆積物を採取する先端部、外

管（パイプ）と中管（ロッド）、ハンドルからなり、一度の掘削で直径6 cm、長さ30 cmの円柱の堆積物が採取でき、人力では深度約6 mまで採取可能である。深度の浅いうちは堆積物の採取も比較的容易であったが、途中、堆積物が固かったりすると器材を押し入れるのが困難になり、数人で体重をかけて押し入れなければならなくなった。また、深度が深くなるにつれて器材の重量はパイプを継ぎ足した分、次第に重くなってくるので、皆で器材を支え、声を掛け合いながら作業を行った。シンウォール型サンプラーでは、深度3.3 mまで採取できた。

続いて、ロシア式サンプラーでの作業を行った。ロシア

式サンプラーの構造はシンウォール型とほぼ同様であるが、一度に深度 60 cm 分の試料が採取でき、10～20 m 前後までの掘削が可能である。採取される試料はカマボコ型のため、堆積物の量はシンウォール型の約半分となる。サンプラーを反転させて、樋の上にきれいな長いコアが出た時には歓声が上がった。シンウォール型、ロシア式両サンプラーに共通する短所は、持ち運ぶには少々重量があること（10～20 kg）と高価なことが挙げられる。雨が降り続く中、シンウォール型で採取した堆積物の片付けと平行してロシア式での作業が行われ、参加者はずぶぬれになりながらも、無事に深度 3 m まで採取できた。

千葉市郊外の宿舎に戻ってからの懇親会では今日一日の労をねぎらい、それぞれの研究についての話が尽きることがなかった。また、参加者の 3 分の 1 がボーリング作業は初めてだったことがわかり、驚いた。

21 日は前日の天気は嘘のように晴れ渡った。宿舎から千葉県立中央博物館まで移動し、前日に採取した堆積物の観察を行った。堆積物を半裁すると、層相の変化や植物の

分解状態などがよくわかり、直接触ったり、堆積物の色を土色帳と比較したりしながら興味深く観察した。また、今回の作業では使用しなかったが、ヒラー型サンプラーとブルーム式サンプラーも並べられ、それぞれの構造や特長が説明された。その後、各自、分析試料の採取や博物館見学をして、解散となった。

データを正確に把握するためには、その試料採取の方法から理解することが重要で、分析の対象、目的に応じて、サンプラーを使い分ける技術も必要である。今回の実習は、数種類のボーリング器材を使用することによって、それぞれの器材の特長を理解し、堆積物の採取方法や試料の扱いを学ぶよい機会であった。また、実際の作業を通じて、分野を越えた共通理解を得ることができたのではないかと考える。今回、器材を提供して頂いた叶内敦子氏と奥田昌明氏（千葉中央博）に、この場をお借りして御礼申し上げます。（〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 明治大学文学部）



図 1 叶内講師によるシンウォール型サンプラーの説明（写真提供：清永丈太）。



図 2 シンウォール型サンプラーによる掘削状況（写真：清永）。



図3 シンウォール型サンプラーからの試料取り出し状況 (写真: 清永).



図4 シンウォール型サンプラーからの試料取り出し状況 (写真: 清永).



図5 シンウォール型サンプラーを引き上げた状況 (写真: 清永).



図6 奥田講師によるロシア式サンプラーの説明(写真:清永).



図7 ロシア式サンプラーによる掘削状況(写真:清永).